

博士論文（要約）

論文題目 久保田万太郎研究

氏名 福井 拓也

久保田万太郎研究

序章 方法と構成について……………	4
第一章 久保田暮雨「春寒」——デビュー以前の万太郎と写生文……………	15
補足資料 久保田暮雨「春寒」(「俳諧草紙」明42・5)……………	36
第二章 「朝顔」——万太郎と耽美派……………	39
第三章 連作「お米と十吉」と「暮れがた」——出発期の小説と戯曲……………	58
第四章 「末枯」——万太郎とノスタルジ……………	76
第五章 『道芝』——私小説・心境小説とジャンルの関係①……………	93
第六章 芥川龍之介「蜃気楼」——私小説・心境小説とジャンルの関係②……………	109
第七章 「釣堀にて」——万太郎と新劇……………	125
第八章 泉鏡花「註文帳」と万太郎脚色——万太郎と新派……………	140
終章 「三の酉」と『流寓抄』——戦後の万太郎と自己表象……………	157
初出一覧……………	181

本文

いまだ出版契約には至っていないものの、博士論文の全部を対象に、「5年以内に出版予定」であるため、その旨を記述するのみとする。

参考文献一覧

- 青木亮人「その眼、」写生」につき」(「ユリイカ」平23・10)。引用は青木亮人『その眼、
「写生」につき 正岡子規、高浜虚子から平成まで』(邑書林、平25・9)より。
- 赤木桁平「白樺派の諸作家」(「文章世界」大5・2)。引用は赤木桁平『芸術上の理想主義』
(洛陽堂、大5・10)より。
- ――「二月の創作と評論」(四)(「時事新報」大5・2・15)
- ――「遊蕩文学」の撲滅」(「読売新聞」大5・8・6、8)
- 秋田雨雀「日本新劇史」(山川幸世、岡倉士郎編『現代演劇論体系① 演劇史』五月書房、
昭26・3)
- 芥川龍之介「昔」(「東京日日新聞」大7・1・1)。引用は『芥川龍之介全集』第三卷
(岩波書店、平8・1)より。
- ――「あの頃の自分の事」(「中央公論」大8・1)。引用は『芥川龍之介全集』第四卷(岩
波書店、平8・2)より。
- ――「私」小説論小見――藤沢清造君に――」(「新潮」大14・11)。引用は『芥川龍之介
全集』第十三卷(岩波書店、平8・11)より。
- ――「年末の一日」(「新潮」大15・1)
- ――「蜃気楼」(「婦人公論」昭2・3)。引用は『芥川龍之介全集』第十四卷(岩波書店、
平8・12)より。
- ――「誘惑」(「改造」昭2・4)
- ――「浅草公園」(「文藝春秋」昭2・4)
- ――「文芸的な、余りに文芸的な」(「改造」昭2・4、6、8)。引用は『芥川龍之介全
集』第十五卷(岩波書店、平9・1)より。
- ――「或旧友へ送る手記」(「東京日日新聞」「東京朝日新聞」昭2・7・25)。引用は『芥
川龍之介全集』第十六卷(岩波書店、平9・2)より。
- ――「闇中問答」(「文藝春秋」昭2・9)。引用は『芥川龍之介全集』第十六卷(前掲)よ
り。
- ――「或阿呆の一生」(「改造」昭2・10)。引用は『芥川龍之介全集』第十六卷(前掲)よ
り。
- ――「齒車」(「文藝春秋」昭2・10)。引用は『芥川龍之介全集』第十五卷(前掲)より。

- 朝田祥次郎「註文帳」考（『甲南大学文学論集』昭41・12）
- 「注」（註文帳）（『日本近代文学大系』第七卷（『泉鏡花集』）角川書店、昭45・11）
- 浅見淵「所謂大家の作品」（『一月の文芸時評』（上）、『信濃毎日新聞』昭10・1・10）
- 安住敦「解説」（『久保田万太郎全句集』中央公論社、昭46・5）
- 「久保田万太郎の俳句」（『市井暦日』東京美術、昭46・9）
- 「ある俳人兄弟の死」（『市井暦日』前掲）
- 『俳句への招待』（文化出版局、昭48・7）
- 「鑑賞」（大野林火編『近代俳句大観』明治書院、昭49・11）
- 「柿の木坂雑唱 以後」（平凡社、平2・7）。
- 網野義紘「久保田万太郎「朝顔」の周囲——明治44年「三田文学」の一齣——」（『近代文学論集——研究と資料——』昭54・6）
- 「すみだ川」の諸問題」（『立教大学日本文学』平10・12）
- 蛙鳴「新刊雑誌（上）（七月の小説界）」（『帝国文学』明40・8）
- 安藤公美「芥川龍之介 鵜沼海岸に住まう 避暑地の印象・揺れる身体・科学と詩学」（『芥川龍之介研究年誌』平23・7）
- 安藤鶴夫「楽しい佳作「青春怪談」 新派七十周年公演の演舞場」（『読売新聞』昭30・3・10）
- 安藤宏「第2章 「言文一致」のよそおい」（『近代小説の表現機構』平24・3）
- 「第6章 表現機構としての「文壇」（『近代小説の表現機構』前掲）
- 「第7章 「私小説」とは何か」（『近代小説の表現機構』前掲）
- 五十嵐伸治「朝顔」論（五十嵐伸治、二瓶浩明、千葉正昭『大正文学』、大正文学会、平3・5）
- 井川滋（しげし）「十一月の小説と戯曲」（『三田文学』明44・12）
- 生田長江「日常生活を偏重する悪傾向——を論じて随筆、心境小説等の諸問題に及ぶ——」（『新潮』大13・7）
- 石川巧「久保田万太郎のト書」（『国語と国文学』平25・11）
- 石川美子「訳者あとがき」（ロラン・バルト（石川美子訳）『ロラン・バルトによるロラン・バルト』みすず書房、平30・5）
- 石割透「久保田万太郎（二）」（『駒沢短大国文』昭59・3）
- 「芥川龍之介「蜃気楼」ノート」（『近代文学研究』平13・2）

- 泉鏡花「註文帳」(「新小説」明34・4)
- 一記者「最近文壇の諸問題」(「早稲田文学」大5・9)
- 一白生「鈴木と若竹」(「文芸俱樂部」大2・9・1)
- 伊藤整「一 小説への疑問(序論として)」(『小説の方法』河出書房、昭23・12)
- 伊藤通明『久保田万太郎』(蝸牛俳句文庫、平9・1)
- 『流寓抄』万太郎小論(「俳句現代」平13・3)
- 岩田豊雄『新劇と私』(新潮社、昭31・12)
- 内田秀樹『紙風船』論——新しい演劇論の試み——(「山梨大学国語・国文と国語教育」平11・8)
- 内田魯庵(白雲子)「月旦録」(「読売新聞」明40・7・14)
- 「先月の小説界」(「趣味」明41・7)
- 宇野浩二「十年文壇事始」(二)(「中外商業新報」昭9・12・30)
- 「十年文壇事始」(三)(「中外商業新報」昭9・12・31)
- 「私小説」私見(「新潮」大14・10)
- 『文章往来』(中央公論社、昭16・10)
- 『芥川龍之介』(文藝春秋新社、昭28・5)。引用は『宇野浩二全集』第十一卷(中央公論社、昭48・2)より。
- ヴァージニア・ウルフ(森山恵訳)『波』(早川書房、令3・6)
- 江沢春霞「盲目柳家小せん」(「文芸俱樂部」大3・2・1)
- 煙生「馬生小せんの二人会」(「文芸俱樂部」大3・4・15)
- 遠藤慎吾、川崎照代「劇評から見た「築地座」の軌跡」(「共立女子大学文学部紀要」昭51・2)
- 老川慶喜『日本史小百科——近代——〈鉄道〉』(東京堂出版、平8・9)
- 大江良太郎「あとがき」(『久保田万太郎全集』第七卷、中央公論社、昭42・5)
- 大笹吉雄『ドラマの精神史』(新水社、昭58・6)
- 『最後の岸田國士論』(中央公論社、平25・9)
- 大須賀乙字「俳句の内的描写」(「人生と表現」大2・7)。乙字遺稿刊行会編『乙字俳論集』(乙字遺稿刊行会、大10・11)より。
- 大山功「築地座 創作座 テアトル・コメディ」(『新劇四十年』三杏書院、昭19・10)
- 「久保田万太郎」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大辞典』第2卷、

平凡社、昭35・6)

岡鬼太郎(鬼太郎)、岡村柿紅(柿紅)、春塘、華堤「第四回」落語研究会評判記」(「文芸倶楽部」明38・7・1)

岡村柿紅「柳家小せんの病氣を見舞ふ文」(「文芸倶楽部」大3・7・15)

岡本綺堂「箕輪の心中」(「演芸画法」明44・5)

小木新造『東京時代 江戸と東京の間で』(講談社学術文庫、平18・6)

興津要「盲小せん研究」(「国文学雑誌」昭44・1)

尾崎宏次「現在各新劇団の活動」(田中千禾夫、内村直也編『新劇手帖』創元社、昭27・2)

小山内薫「戯曲を選みて」(「太陽」明44・7)

——「大川端」(「読売新聞」明44・8・8・9・13)

——「所謂「遊蕩文学」に就て——吉井勇君へ——」(「時事新報」大5・8・12、15)

越智治雄「大正期の戯曲——その出発点の素描——」(『明治大正の劇文学』塙書房、昭46・9)

——「大寺学校」の世界」(『明治大正の劇文学』前掲)

奥田雅則「芥川龍之介『蜃気楼』論——〈蜃気楼〉を生むもの、その実態——」(「関西学院大学人文学会 人文論究」平25・12)

恩田侑布子「解説」(恩田侑布子編『久保田万太郎俳句集』岩波文庫、令3・9)

榎原修「私小説という問題と小説の方法」(『私』という方法 フィクションとしての私小説』笠間書院、平24・12)

片上天弦「新作月評」(「文章世界」明41・10)

——「評論の評論」(「文章世界」明43・11)

金杉惇郎「アルト・ツキダイズムを排撃せよ」(「劇作」昭7・4)

金子筑水(TK生)「室中偶語(5) 最近の創作」(「新潮」大6・9)

金丸文夫『万太郎を師とした宗匠 増田龍雨』(非売品、平30・4。「旧派の群像」増田龍雨をめぐる俳人模様——「春燈」平25・1・27・12)に加筆補正をしたもの)

加能作次郎「八月の文壇」(「早稲田文学」大元・9)

——「文壇近事」(「文章世界」大5・10)

川口一郎「戯曲と俳優」(「文芸通信」昭10・4)

川崎明「久保田万太郎における戯曲の方法——初期の作品について——」(「文芸研究／日本文芸研究会」昭35・3)

川島みどり「泉鏡花『註文帳』試論——変容する《物語》——」(「明治大学大学院研究論集」平14・9)

川名大「第一章 俳句と表現」(楠本憲吉、川名大『新・俳句への招待』日賀出版社、昭53・1)

——『現代俳句』上(ちくま学芸文庫、平13・5)

川路柳虹「詩の時代」(「現代詩歌」大8・3)

川端康成「高浜虚子「虹」・「愛居」」(「人間」昭22・4)。引用は『川端康成全集』第二十卷(新潮社、昭57・10)より。

河東碧梧桐「疑問」(『俳諧漫話』新声社、明36・11)

河村政敏「確認の抒情から喪失の抒情へ」(「解釈と鑑賞」昭44・8)

イマヌエル・カント(宇都宮芳明訳・注解)『判断力批判』上(以文社、平16・4)

菊池寛「文芸作品の内容的価値」(「新潮」大11・7)

岸田国土「戯曲以前のもの」(「演劇新潮」大14・5)。引用は『岸田国土全集』19(岩波書店、平元・12)より。

——「職業」(「文藝春秋」昭8・8)

——「久保田万太郎氏著「釣堀にて」」(「東京日日新聞」昭12・6・16)

北川透「写生文のイロニー——正岡子規を中心に——」(「文学」昭61・8)

北村喜八「小山内薫論」(『近代日本文学研究 大正文学作家論』上巻、小学館、昭18・9)

北村透谷「粹を論じて「伽羅枕」に及ぶ」(「女学雑誌」明25・3・12)

——「伽羅枕」及び「新葉末集」(「女学雑誌」明25・3・19)

北村倫子「芥川龍之介「蜃気楼」——「話」らしい話のない小説の方法——」(「国文学言語と文芸」平7・9)

喜多村緑郎(緑樹)、久保田万太郎(傘雨)編『鵬の賛』(太平楽、大7・11)

木下杢太郎「和泉屋染物店」(「スバル」明44・3)

——「三新作脚本の実演」(「スバル」明44・7)

——「跋」(『和泉屋染物店』東雲堂書店、明45・7)

——「[Elegia di un filosofo giovane]」(「文芸復興」大3・6)

——「門を守る老人の独白」(初出未詳) 〓「曲中人物」(『木下杢太郎詩集』)

Q「『かぐや』 築地座を見る」(「東京朝日新聞」昭7・11・4)

楠見孝編『なつかしさの心理学——思い出と感情』(誠信書房、平26・5)

- 楠本憲吉「万太郎俳句私観」(「俳句」昭28・8)
- 「万太郎俳句手引」(『近代俳句の成立』現代書房、昭30・6)
- 楠山正雄「国民生活の様式としての演劇」(「中央公論」大3・7・15)
- 久保栄「新劇、その劇団その俳優」(「演芸画報」昭10・1)
- 「迷へるリアリズム——新劇のために——」(「都新聞」昭10・1・20、23)
- 久保田晴次『芭蕉受容の研究』(桜楓社、昭49・9)
- 久保田正文「最後のスタイル」(「宝島」昭40・3)。引用は(『芥川龍之介・その二律背反』いれぶん出版、昭51・8)より。
- 久保田万太郎(暮雨、千野菊次郎、傘雨、松村傘雨)「春寒」(「俳諧草紙」明42・5)
- 「朝顔」(「三田文学」明44・6)
- 「遊戯」(「三田文学」明44・7)
- 「Prologue」(「太陽」明44・7)
- 「陰影」(「三田文学」明44・10)
- 「花火」(「スバル」明44・11)
- 「挿話」(「朱戀」明44・11)
- 「暮れがた」(「スバル」明45・1)
- 「お米と十吉」(「新小説」明45・1)
- 『浅草』(靱山書店、明45・2)
- 「浅草田原町」(「三田文学」明45・2)
- 「雪」(「太陽」明45・5)
- 「はつ夏」(「三田文学」明45・6)
- 「なりゆき」(「新小説」大元・8)
- 「川波」(「新潮」大元・11)
- 「おえいさんの事」(「三田文学」大元・12)
- 「水のおもて」(「三田文学」大2・3)
- 「小てるとつる代」(「今様」大2・5)
- 「わかるゝとき」(「新小説」大2・9)
- 「ふゆぞら」(「三田文学」大2・9)
- 「一とまぐ」(「処女」大2・11)
- 「凶」(「中央公論」増刊新脚本号、大3・8)

- | 「路」〔東京朝日新聞〕大3・10・3、11・9
- | 「小藤の一周忌」〔新小説〕大3・11
- | 「今戸橋」〔中央公論〕大4・4
- | 「小なつのこと」〔三田文学〕大5・1
- | 「続小なつのこと」〔三田文学〕大5・4
- | 「文章を書く心構」〔文章倶楽部〕大5・6
- | 「末枯」〔新小説〕大6・8
- | 「月の秋」〔俳諧雑誌〕大6・10
- | 「藻花集の後に」〔藻花集〕靑山書店、大6・12
- | 「画面」〔三田文学〕大7・1
- | 「老犬」〔三田文学〕大7・3、4、8、11
- | 『恋の日』(新潮社、大8・1)
- | 「歎き」〔三田文学〕大8・2、4
- | 「菜の花」〔三田文学〕大9・6
- | 「『雨空』のあとに」〔人間〕大10・1
- | 「『末枯』を書くまで」〔文章倶楽部〕大10・4、5
- | 「三筋町より」(金星堂、大10・9)
- | 「冬」〔新潮〕大12・1、大15・3
- | 「くづれやな」〔東京日日新聞〕大12・2・14、4・12、「大阪毎日新聞」大12・2・14、4・14
- | 「短夜」〔中央公論〕大14・1
- | 「水上瀧太郎君と泉鏡花先生」〔中央公論〕大14・2
- | 「うつぎぐもり」〔文藝春秋〕大14・7
- | 「月夜」〔中央公論〕大14・9
- | 「夜の秋」〔文藝春秋〕大14・9
- | 「たうもろこし」〔文藝春秋〕大14・10
- | 「秋と冬」〔文藝春秋〕大15・1
- | 「夏隣」〔文藝春秋〕大15・6
- | 「梅雨」〔文藝春秋〕大15・7
- | 「秋」〔文藝春秋〕大15・9

- ――「冷」(「文藝春秋」大15・11)
- ――「大寺学校」(「女性」昭2・1、2、4、5)
- ――『道芝』(俳書堂、昭2・5)
- ――「雷門以北」(「東京日日新聞」昭2・6・30～7・16、「三田文学」昭2・10～12)
- ――「雷門以北」後記」(「三田文学」昭2・10～12)。引用は『久保田万太郎全集』第十卷(中央公論社、昭43・3)より。
- ――「かれは」(「新潮」昭3・1)。引用は『久保田万太郎全集』第十一卷(前掲)より。
- ――「春泥」(「大阪朝日新聞」昭3・1・5～4・4)
- ――「日暮里雜記」(「三田文学」昭3・12)
- ――「不動さま」(「時事新報」夕刊、昭4・6・1～30)。引用は『久保田万太郎全集』第十卷(中央公論社、昭42・10)より。
- ――「たゞ一つの希望」(「新東京」パンフレット、昭5・6)。引用は『久保田万太郎全集』第十三卷(中央公論社、昭42・7)より。
- ――「語を寄す、新東京の諸君」(「新東京」パンフレット、昭5・10)。引用は『久保田万太郎全集』第十三卷(前掲)より。
- ――「かどで」(「文藝春秋」昭6・4～6)
- ――「築地座」一周年を迎へて」(「築地座」パンフレット、昭8・2)。引用は、田村秋子、内村直也『築地座―演劇美の本質を求めて―』(丸ノ内出版、昭51・10)より。
- ――「町中」(「東京日日新聞」昭8・8・31～10・20)
- ――「月あかり」(「週刊朝日」秋季特別号、昭8・9)
- ――『もゝちどり』(文芸社、昭9・6)
- ――「釣堀にて」(「改造」昭10・1)
- ――「新劇の貧困」(発表誌未詳、昭和十年三月執筆)。引用は『久保田万太郎全集』第十卷(前掲)より。
- ――「汐干潟」(「中央公論」昭10・5)
- ――「さんうてい夜話」(「東京日日新聞」昭10・8～11・7)。引用は『久保田万太郎全集』第十三卷(前掲)より。
- ――「ふりだした雪」(「文芸春秋」昭11・4)
- ――『ゆきげがは』(双書房、昭11・8)
- ――「附記」(『釣堀にて』双書房、昭12・5)

- ―「蜚」〔改造〕昭12・7)
- ―「花冷え」〔中央公論〕昭13・6)
- ―「無言」〔婦人公論〕昭18・9)
- ―「旧作」〔劇場〕昭21・1)
- ―「選後に」(一)〔春燈〕昭21・3)。引用は『久保田万太郎全集』第十四卷(中央公論社、昭42・6)より。
- ―「本多さん」(初出誌紙未詳)。引用は『だれにいふともなく』(演劇文化社、昭22・2)より。
- ―「後記」〔久保田万太郎全集』第二卷、好学社、昭22・5)
- ―「後記」〔久保田万太郎全集』第六卷、好学社、昭23・8)
- ―「祝宴」〔心〕昭24・4)
- ―「市井人」〔改造〕昭24・7、9)
- ―「後記」〔久保田万太郎全集』第一卷、好学社、昭24・12)
- ―「うしろかげ」〔改造文芸〕昭25・1、5)。引用は『久保田万太郎全集』第四卷(中央公論社、昭42・4)より。
- ―「モデルと作者」〔別冊文藝春秋〕昭25・8、10)
- ―「柴又」〔中央公論〕昭25・10)
- ―「それから――それの――」〔改造〕昭26・1)
- ―「人と人の……」〔新潮〕昭27・1)
- ―「後記」〔春泥・花冷え』岩波文庫、昭27・1)
- ―「草の丈」(創元社文庫、昭27・11)
- ―「鷗外よりも……」〔新潮〕昭28・2)
- ―「にはかへんろ記」〔別冊文藝春秋〕昭28・6)
- ―「休憩三十分」〔別冊文藝春秋〕昭28・8)
- ―「鷗」〔文学界〕昭28・12)。引用は『久保田万太郎全集』第七卷(中央公論社、昭42・5)より。
- ―「日本海の波」〔別冊文藝春秋〕昭29・2)
- ―「あとがき」〔末枯・続末枯・露芝』岩波書店、昭29・5)
- ―「他人のはなし」〔別冊文藝春秋〕昭29・7)
- ―「真菰の中」〔別冊文藝春秋〕昭29・8)

- 「解説」(永井荷風『すみだ川 他四篇』岩波文庫、昭30・7)
- 「註文帳」(「心」昭30・7、8)
- 「三の酉」(「中央公論」昭31・1)
- 「喜劇役者の憤り」(「新潮」昭31・1)
- 「しのび泣き」(「中央公論」昭31・6)
- 「解説」(三遊亭円朝『真景累ヶ淵』岩波文庫、昭31・6)
- 『三の酉』(中央公論社、昭31・10)
- 「火事息子」(「オール読物」昭31・10、32・2)
- 「申訳ない気持——読売文学賞受賞の言葉——」(「読売新聞」昭32・1・25)
- 「一つの回想」(「芸術新潮」昭32・3、12)。引用は『久保田万太郎全集』第十三卷(前掲)より。
- 「いま思つてゐること」(発表誌未詳)。引用は『心残りの記』(筑摩書房、昭33・7)より。
- 「岩吉」(「中央公論」昭33・8)
- 『流寓抄』(文藝春秋新社、昭33・11)
- 「よしや わざくれ」(青蛙房、昭35・11)
- 「波の音をきゝつゝ——鎌倉より吉井勇さんへ——」(発表誌未詳)。引用は(『よしや わざくれ』前掲)より。
- 「火事息子」(「心」昭36・6、8)
- 『流寓抄以後』(文藝春秋新社、昭38・12)
- 『久保田万太郎全句集』(中央公論社、昭46・5)
- 久保田万太郎、大場白水郎編『藻花集』(靑山書店、大6・12)
- 久保田万太郎、中山善三郎「俳句よもやま話」(「春燈」昭39・5)
- 久米正雄「私」小説と「心境」小説(「文芸講座」大正14・1、5)
- 九龍生「新刊月評」(「明星」明41・7)
- 桑原經重「幸福な「新派」」(「演劇界」昭26・12)
- 郡司正勝「花柳章太郎の死・新派・女形」(「テアトロ」昭40・3)
- ミラン・クンデラ(西永良成訳)『裏切られた遺言』(集英社、平6・9)
- K「築地座公演——異色ある「短夜」——」(「東京朝日新聞」昭8・5・29)
- 月日子「七月の文芸」(五)(「時事新報」明44・7・11)

- 小島政二郎『俳句の天才——久保田万太郎』（彌生書房、昭55・6）。引用は小島政二郎『俳句の天才——久保田万太郎（新装版）』（彌生書房、平9・7）より。
- 榎笑楽「炭焼」（『ホトトギス』明43・3）
- 胡刀子「三月の小説と脚本」（『国民新聞』明44・3・26）
- 後藤杜三『わが久保田万太郎』（青蛙房、昭49・3）
- 小仲信孝「消された身体——田山花袋『蒲団』の時代——」（『国学院雑誌』平16・11）
- 小林誠一「泉鏡花の幻想性について——『註文帳』の方法——」（『駒沢大学大学院国文学会論輯』昭57・2）
- 小林秀雄「故郷を失った文学」（『文芸春秋』昭8・5）
- 小宮豊隆（蓬里雨）「最近の文壇（二月の小説評）」（『新小説』明44・3）
- 「朝顔」と『モデルのうたへる歌』と」（『東京朝日新聞』明44・6・11）
- 「七月の劇と小説」（下）（『東京朝日新聞』明44・7・8）
- 「盲ひたる評家（中村星湖氏に）」（『東京朝日新聞』明44・8・11）
- 「『新脚本号』を評す 一」（『時事新報』大3・7・24）
- 「『新脚本号』を評す 三」（『時事新報』大3・7・26）
- 西東三鬼『三鬼百句』（現代俳句社、昭23・9）。引用は『西東三鬼全句集』（角川ソフィア文庫、平29・12）より。
- 佐伯順子「泉鏡花と近代演劇の『実験』——『天守物語』からよむ日本演劇史」（『演劇とパフォーマンス』（『岩波講座 文学』5）岩波書店、平16・2）
- 境忠一『詩と故郷』（桜楓社、昭46・3）
- 坂上博一「『すみだ川』の意味」（『日本文学』昭46・12）
- 柳山潤「巧妙なる手品師」（『新年号の創作時評』（5）、『報知新聞』昭9・12・24）
- 阪中正夫「今日不振、明日不振ならず！」（『文芸通信』昭10・4）
- 坂本四方太（文泉子）「写生文に就て」（『ホトトギス』明39・6）
- 「文話三則」（『ホトトギス』明39・12）
- 「文話（写生文と小説との区別に就いて）」（『ホトトギス』明41・12）
- 桜井十郎「大好な馬生」（『文芸倶楽部』大6・2・1）
- 佐藤郁子「註文帳」（『芸術至上主義文芸』昭58・11）
- 里見淳「文芸管見」（『改造』大11・8）
- 寒川鼠骨「写生文壇」（『ホトトギス』明43・11）

- 三太郎「六号活字」〔「文庫」明41・7〕
- 三遊亭圓朝「真景累が淵」〔「やまと新聞」明20・9・9、21・3・1〕。引用は『圓朝全集』第五卷（岩波書店、平25・8）より。
- 篠崎美生子「第二節 「蜃気楼」——小さな「物語」群の意味——」〔『弱い「内面」の陥穽——芥川龍之介から見た日本近代文学——』翰林書房、平29・5〕
- フレドリック・ジェイムソン（大橋洋一、木村茂雄、太田耕人訳）『政治的無意識』（平凡社ライブラリー、平22・4）
- 時評記者「最近文壇（四月中旬より五月中旬まで）の記録」〔「文章世界」明45・6〕
- エーミール・シュタイガー（高橋英夫訳）『詩学の根本概念』（法政大学出版局、昭44・4）
- 諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編『古今東西落語家事典』（平凡社、平元・4）
- 神西清「読書日記抄」〔「文芸」昭22・6・7〕
- 鈴木貞美『日記で読む日本文化史』（平凡社新書、平28・9）
- 鈴木登美「ジャンル・ジェンダー・文学史記述——「女流日記文学」の構築を中心」（ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、平11・4）
- 瀬崎圭二「流行研究会と塚原洪柿園——〈江戸趣味〉の中の身ぶり——」〔「国文学攷」平25・12〕
- 相馬御風（G生）「七月文壇概観」〔「早稲田文学」明44・8〕
- 相馬庸郎『子規・虚子・碧梧桐——写生文派文学論』（洋々社、昭61・7）
- 祖父江昭二「近代戯曲集解説」〔『日本近代文学大系』第四十九卷、『近代戯曲集』角川書店、昭49・8〕
- 高田瑞穂「耽美派の展開（2）——荷風による耽美派の開化」〔「解釈と鑑賞」昭51・2〕
- 高野光平『昭和ノスタルジー解体』（晶文社、平30・4）
- 高橋春雄「写生文と自然主義」〔「解釈と鑑賞」昭43・9〕
- 高橋龍夫「「蜃気楼」論 表現主義的世界」（「芥川龍之介研究年誌」平22・9）
- 高浜虚子「俳話（二）」〔「ホトトギス」明37・2〕Ⅱ「田舎趣味」「消極趣味」「写生趣味と空想趣味」「和歌と琴」（『俳諧馬の糞』俳書堂、明39・1）。引用は『俳諧馬の糞』より。
- 「消息」〔「ホトトギス」明38・9〕
- 「写生文の由来とその意義」〔「文章世界」明40・3〕。引用は『定本 高浜虚子全集』第十二卷（毎日新聞社、昭49・9）より。

- ―「風流懺法」(「ホトトギス」明40・4)
- ―「斑鳩物語」(「ホトトギス」明40・5)
- ―「大内旅館」(「ホトトギス」明40・7)
- ―「主観的写生文」(「国民新聞」明40・8・30)
- ―「雑魚網」(「ホトトギス」明40・9)
- ―「勝敗」(「ホトトギス」明40・10)
- ―『鶏頭』(春陽堂、明41・1)
- ―「三十五歳」(「ホトトギス」明41・2)
- ―「俳諧師」(「国民新聞」明41・2・18～7・28)
- ―「暗き夜」(「ホトトギス」明41・6)
- ―「写生文界の転化」(「文章世界」明41・12)
- ―「俳趣味は古典的也」(「文章世界」明42・7)
- ―「第十四巻第一号の首に」(「ホトトギス」明43・10)
- ―「高野の火」(「ホトトギス」明43・10)
- ―「石火矢」(「ホトトギス」明43・11)
- ―「石火矢」(「ホトトギス」明44・1)
- ―「進むべき俳句の道」(「ホトトギス」大4・4～大6・8)。引用は『定本 高浜虚子全集』第十巻(毎日新聞社、昭49・2)より。
- ―「芭蕉の境涯と我等の境涯」(「ホトトギス」大12・7)
- ―『五百句』(改造社、昭12・6)
- ―「花鳥諷詠ならびに写生といふことを反覆する」(「ホトトギス」昭19・5)。引用は『定本 高浜虚子全集』第十一巻(毎日新聞社、昭49・4)より。
- ―「虹」(「苦楽」昭22・1)
- 高見順「三田文学」その他(『対談 現代文壇史』中央公論社、昭32・7)
- 武智鉄二「新劇はどうしてつまらないか」(『私の演劇論争』筑摩書房、昭33・6)
- 多田蔵人「永井荷風『すみだ川』の位置」(「文学」平25・7)
- 橘左近『東都噺家系図』(筑摩書房、平11・1)
- 橘家圓喬(談)「己の芸が分らぬ」(「読売新聞」明39・4・21)
- 田中喜一「劇作派の作家・岸田国士・その他――世態的リアリズムの実態――」(「国文学」昭41・10)

- 谷口基『怪異異譚——怨念の近代』（水声社、平21・8）
- 谷崎潤一郎「刺青」（『新思潮』明43・11）
- 田村秋子、小山祐士『一人の女優の歩んだ道』（白水社、昭37・7）
- 田村秋子、伴田英司『友田恭助のこと』（中央公論社、昭47・1）
- 田山花袋「露骨なる描写」（『太陽』明37・2）
- アーサー・C・ダントー（松尾大訳）『ありふれたものの変容——芸術の哲学』（慶應義塾大学出版会、平29・10）
- 近松秋江（徳田秋江）「七月の小説」（三）（『国民新聞』明44・7・16）
- 千葉正昭「久保田万太郎『朝顔』素描」（『日本文芸論叢』平元・10）
- 「研究動向 久保田万太郎」（『昭和文学研究』平5・2）
- 「久保田万太郎『三の酉』文体」（『解釈』平5・10）。引用は『記憶の風景 久保田万太郎の小説』（武蔵野書房、平10・11）より。
- 筑紫磐井『伝統の探求〈題詠文学論〉——俳句で季語はなぜ必要か』（ウエップ、平24・9）
- 坪井秀人「『蜃気楼』論——芥川龍之介の〈詩的精神〉——」（『名古屋近代文学研究』昭58・9）
- 「近代史における〈言と文〉」（『文学』平19・11・12）
- 坪内逍遙「新脚本と其の前途」（『早稲田文学』明43・5）
- フレッド・デーヴィス（間場寿一、荻野美穂、細辻恵子訳）『ノスタルジアの社会学』（世界思想社、平2・3）
- 暉峻康隆『落語の年輪』（講談社、昭53・3）
- 戸板康二「新派・新国劇・前進座」（『演劇年鑑 昭和二十三・四年版』北光書房、昭23・12）
- 「久保田万太郎」（『文藝春秋』昭42・11）
- 「鑑賞」（『日本短篇文学全集』第20巻、筑摩書房、昭44・2）
- 塔「今月の雑誌」（『読売新聞』大2・9・4）
- 東郷克美「鏡花の感覚と認識——夢魔はいかにして顕現するか——」（『解釈と鑑賞』昭56・7）
- 東渡生「二月の小説」（『東京朝日新聞』明44・2・16）
- 堂本正樹「雪なれや万太郎」（『三田文学』昭42・6）

- 徳田秋声「心境から客観へ」(「新潮」大15・6)
- 戸部銀作「新派の演技」(「演劇界」昭30・4)
- 永井荷風「深川の唄」(「趣味」明42・2)
- 「すみだ川」(「新小説」明42・12)
- 「紅茶の後」(「三田文学」明43・10)
- 「第五版すみだ川之序」(『すみだ川』艸山書店、大2・3)。引用は『永井荷風全集』
- 第五卷(岩波書店、昭38・1)より。
- 永井聖剛「〈虚子の写生から小説へ〉の意味——『文章世界』の「写生と写生文」特集から——」(「日本文学」平9・12)
- 永井博「孤独な青年の死…永井荷風「すみだ川」論」(「四日市大学論集」平10・3)
- 中川龍一「日本の新劇の生長と発展 自由劇場—築地小劇場—築地座」(『新劇手帖』前掲)
- 長田秀雄「歓楽の鬼」(「三田文学」明43・10)
- 長沼光彦「蜃気楼」の空間(「新潟大学国語国文学会誌」平7・3)
- 中村秋湖「蝶花楼馬楽」(「文芸倶楽部」大3・2・1)
- 中村星湖(銀漢子)「小説月評」(「早稲田文学」明40・2)
- 「崖から」(「東京朝日新聞」明44・8・1)
- 中村孝夫「釣堀にて」についてのノオト(「悲劇喜劇」平5・2)
- 中村光夫「芸を売らぬ大家」(「東京新聞」(夕刊)昭24・9・2)
- 中村武羅夫「本格小説と心境小説と」(「新小説」大13・1)
- 中村良衛「現在」という水脈——永井荷風『すみだ川』試論——(「日本近代文学」平11・5)
- 中谷克己「鏡花「註文帳」考」(「青須我波良」平9・12)
- 夏目漱石「写生文」(「読売新聞」明40・1・20)
- 「文鳥」(「大阪朝日新聞」明41・6・13、21)
- 奈良崎英穂「鏡花『註文帳』における霊的形象」(「日本文芸研究」平2・10)
- 成田龍一「故郷」という物語 都市空間の歴史学(「吉川弘文館」平10・7)
- 成瀬桜桃子「久保田万太郎——人生流寓」(成瀬桜桃子、阿部完市、星野紗一、桂信子、杉本雪、飴山実、飯島晴子『わが愛する俳人』第二集、昭53・10)
- 「久保田万太郎の俳句」(「ふらんす堂」平7・10)
- 野田宇太郎「錦絵と近代詩」(『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社、昭50・11)

野田学「岸田國士と現代演劇―ピンターとの類似、そして時代を写す〈癡癡〉」(『現代演劇』平 18・12)

野山嘉正『近代小説の青春』(岩波書店、平 9・11)

萩原朔太郎「芥川龍之介の死」(『改造』昭 2・9)

——『詩の原理』(第一書房、昭 3・12)

ブレイズ・パスカル「幾何学的精神について」(前田陽一、由木康訳『パンセ』II、中公クラシックス、平 13・10)

リンダ・ハッチオン(片淵悦久、鴨川啓信、武田雅史訳)『アダプテーションの理論』(晃洋書房、平 24・4)

破天郎「八月文壇の印象評」(『文章世界』太元・9)

花柳章太郎「消えゆく女形」(『役者馬鹿』三月書房、昭 39・3)

——「女形の運命」(『役者馬鹿』前掲)

馬場孤蝶「文化の変遷と寄席の今昔」(『新文学』大 10・3)。引用は『明治の東京』(中央公論社、昭 17・5)より。

林和「湖上の唄」(『早稲田文学』明 44・7)

林廣親「〈演劇の近代〉と戯曲のことば——木下杢太郎「和泉屋染物店」・久保田万太郎「かどで」を視座として」(『戯曲を読む術』笠間書院、平 28・3)

林正子「泉鏡花『註文帳』の美的法則とその効果」(『国文学研究ノート』昭 58・8)

B「文芸雑誌 2 月号評」(『西日本新聞』昭 28・1・31)

東雅夫『遠野物語と怪談の近代』(角川選書、平 22・8)

日高勝之『昭和ノスタルジアとは何か——記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』(世界思潮社、平 26・5)

平岡敏夫「『蜃気楼』の方法」(『芥川龍之介』大修館書店、昭 57・11)

平畑静塔「優季論」(『俳句』昭 36・11)。引用は平畑静塔『俳人格——俳句への軌跡——』(角川書店、昭 58・8)より。

広津和郎「散文芸術の位置」(『新潮』大 13・9)

藤森清「『蒲団』における二つの告白——誘惑としての告白行為——」(『日本近代文学』平 5・5)

ノースロップ・フライ(海老根宏、中村健二、出淵博、山内久明訳)『批評の解剖』(法政大学出版局、昭 55・6)

ピエール・ブルデュー（加藤晴久訳）『パスカルの省察』（藤原書店、平21・9）

堀切実「取合せ論の検討―許六対去来・野坡の論争を中心に―」（『国語と国文学』昭46・3）

――「取合せ論の史的考察―その本質と根拠―」（『連歌俳諧研究』平20・9）

J・L・ボルヘス（鼓直訳）『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』（『伝奇集』岩波文庫、平5・11）

正岡容「当代志ん生の味」（『正岡容集覧』仮面社、昭51・7）

正岡子規「俳諧大要」（『日本』明28・11・1～12・31）。引用は『子規全集』第四卷（講談社、昭50・11）より。

――「熊手と提灯」（『ホトトギス』明32・12）

――「叙事文」（『日本附録週報』明33・1・29、2・5、3・12）。引用は『子規全集』第十四卷（講談社、昭51・1）より。

――「ホトトギス第四卷第一号のはじめに」（『ホトトギス』明33・10）

真猿山人「蝶花楼馬楽」（『文芸倶楽部』明38・12・1）

――「講談師
落語家」「当世逸話摘」（『文芸倶楽部』明39・10・15）

――「前座時代」（『文芸倶楽部』、明43・1・15）

――「春興可笑記」（『文芸倶楽部』明44・1・15）

増田龍雨「小せんの死」（『俳諧雑誌』大8・7）

松井利彦「写生文体の創始――指導理論と「俳」的要素――」（『国語と国文学』昭50・8）
丸岡明「川端の『鬼気』と丹羽の『野望』」（『時事新報』（夕刊）昭26・12・21）

――「久保田万太郎と水上瀧太郎」（佐藤朔、池田弥三郎、白井浩司編『久保田万太郎回想』中央公論社、昭39・12）

三浦正勝「神経病としての怪談――日本近現代怪談文学史（1）」（『埼玉学園大学紀要』人間学部篇』平19・12）

三島由紀夫「解説」（『南京の基督 他七編』角川文庫、昭21・9）

水原秋桜子「無季俳句を排す」（『馬酔木』昭11・3～12）。引用は『水原秋桜子全集』第六卷（講談社、昭53・8）より。

――「久保田さんの俳句」（『久保田万太郎回想』前掲）

水上瀧太郎「賢さん」（『三田文学』明45・4）

――「末枯の作者」（『三田文学』大8・9）

——「たのむ」と「大寺学校」(「三田文学」昭3・12)

宮内淳子「岸田國士「ママ先生とその夫」の上演をめぐる——劇的なものの発信——」

(「日本近代文学」平28・5)

宮内義治「切れぎれのこと」(「久保田万太郎全集 月報13」中央公論社、昭43・4)

宮城学院女子大学人文社会科学研究所編『ノスタルジーとは何か』(翰林書房、平30・10)

三宅周太郎「劇評」(「東京日日新聞」昭7・2・29)

宮信明「素喃との出会い——三遊亭円朝『真景累ヶ淵』論——」(「立教大学日本文学」平21・12)

宮本生「七月の小説」(「ホトトギス」明44・8)

三好行雄「反近代の系譜」(「解釈と鑑賞」昭35・1)。引用は三好行雄『日本文学の近代と反近代』(東京大学出版会、昭47・9)より。

武者小路実篤「雑感」(「白樺」大6・9)

村田稲造「木下杢太郎と「和泉屋染物店」」(「講座 日本の演劇」5、勉誠社、平9・2)

室生犀星「芭蕉襦記」(武蔵野書院、昭3・5)

——「解説」(『明治大正文学全集』第四十五卷、春陽堂、昭4・9)

森田草平「自然主義時代に演ぜられた『朝日文芸欄』の役目」(「早稲田文学」昭2・6)

森達也『オカルト 現れるモノ、隠れるモノ、見たいモノ』(角川文庫、平28・6)

森林太郎「ユリウス・バツプの戯曲論」(「スバル」明42・2)

柳澤孝子「久保田万太郎の出発点——胡蝶本『浅草』を中心に——」(「国文学研究」昭55・10)

柳家小せん「失明するまで」(「都新聞」大4・10・23、12・23)

山川静夫「花柳の女形芸 藝のことと藝のこと寒の梅」(「演劇界」平6・8)

山崎甲一「物言わぬ文鳥」(「国語と国文学」平6・2)

山下航正「漱石の写生文と同時代——虚子と自然主義、その様相」(「近代文学詩論」平11・12)

山本健吉『定本 現代俳句』(角川学芸出版、平10・4)

山本三生編『俳諧歳時記(冬の部)』(改造社、昭8・10)

湯浅雅子「現代日本演劇に於ける純粹演劇から不条理劇演劇への流れの考察——岸田國士・

別役実・岩松了の場合——」(「日本演劇学会紀要」平8・5)

吉井勇「俳諧亭句楽の死」(「中央公論」大3・4)

- ―「句楽と小しん」(「週刊朝日」大13・2)
- ―「台水擅那」(初出誌未詳)。引用は『吉井勇全集』第七卷(番町書房、昭39・3)より。
- LON「中間小説評」(「読売新聞」昭31・11・29)
- 脇明子『増補 幻想の論理』(沖積舎、平4・11)
- 〔執筆者未記名・複数人による記事・記事名なし等の参考文献〕
- ―「落語家放火嫌疑の後談」(「東京朝日新聞」明30・1・26)
- ―「梅朝の公判延期さる」(「東京朝日新聞」明30・2・7)
- ―「梅朝無罪の宣告を受く」(「東京朝日新聞」明30・2・26)
- ―「ホトトギス」(明31・11)
- ―「ホトトギス」(明32・11)
- ―「ホトトギス」(明33・9)
- ―「鏡花の註文帳を評す」(「読売新聞」明34・4・22)
- ―「寄席改良案(三)」(「読売新聞」明36・3・6)
- ―^{口演者}「福笑ひ」(「文芸倶楽部」明41・1・15)
- ―「二月の小説」(「趣味」明41・3)
- ―「国民新聞」(明42・10・22)
- ―「国民新聞」(明42・11・12)
- ―「国民新聞」(明42・11・28)
- ―^{口演者}「旅もの語り」(「文芸倶楽部」、明43・7・15)
- ―「ホトトギス」(明43・10)
- ―「七月の小説と劇」(「三田文学」明44・8)
- ―「スバル」(明45・4)
- ―「紹介」(「スバル」明45・7)
- ―「前月文壇史」(「新潮」大2・10)
- ―「俳諧雑誌」(大8・7)
- ―「新潮合評会第四三回(一月の創作評)」(「新潮」昭2・2)
- ―「泉鏡花座談会」(「文藝春秋」昭2・8)
- ―「芥川龍之介氏の追悼座談会——第五十回新潮合評会——」(「新潮」昭和2・9)

- 「築地座」パンフレット。引用は『築地座―演劇美の本質を求めて―』（前掲）より。
- 「座談会「新派」を語る——これからの新派とその俳優たちと——」（「演劇界」昭22・8）
- 「文壇俳句会」（「文藝春秋」増刊、昭26・12・5）
- 「よみうり寸評」（「読売新聞」昭32・1・24）
- 「女形芸道うらおもて」（「中央公論」昭36・5）
- 「特集 現代の演劇と文学」（「昭和文学研究」令2・9）

※一部号については近代人物研究会編『近代人物号筆名辞典』（柏書房、昭54・10）を参照した。

論文の内容の要旨

論文題目 久保田万太郎研究

氏名 福井拓也

「朝顔」（「三田文学」明 44・6）の発表より昭和三十八年の死に至るまで、五十有余年にわたる久保田万太郎（1889～1963）の文学活動の総体を明らかにしようとする試みはいまだ少ない。「浅草」の作家、「下町文学」の作家というあまりに明白な規定が、その創作の多様さを覆い隠したのだろうか。専ら小説を中心として記述されてきた日本近代文学史において、小説、戯曲、俳句を往還する彼の創作における相互作用、さらには新劇、新派の脚色や演出に携わってきた舞台人としての側面が問いかけられることは稀であった。それゆえにまた「浅草」という舞台がなぜ万太郎文学に不可欠であったか、表現に内在する必然性から考察する発想も欠けがちで、その地に向けられた彼のまなざしの質が精緻に分析されることもなかったのである。

本研究は、縦軸に久保田万太郎の作家論、横軸にジャンル論を布置することで織りなされる。諸ジャンルを往還する彼の創作を辿ることで、時代時代のジャンル間の関係性を解き明かすこと、同時に個としての彼の創作と、先行するジャンルの枠組みとの間のせめぎ合いを記述することを目的とする。それはまた単線的に自己の生を捉えることを拒んだ万太郎の姿勢に応じつつ、彼の全体像に迫るために選び取られた方法でもある。

論文の構成は下記の通りである。

まず第一章「久保田暮雨「春寒」——デビュー以前の万太郎と写生文」では、デビュー以前の万太郎の習作ともいえるべき写生文「春寒」（「俳諧草紙」明 42・5）と、明治四十年代の写生文の表現意識との差異について検討した。そしてそこに万太郎が先行する文学表現に対して抱いていた不満の正体を明らかにした。それは季節のめぐりと結びついた私的な生活感情を言葉にする方法意識の欠如であり、またその間のギャップこそが、反復性と不可逆性という対立する時間意識の調和と背理を軸とする表現に、以後の万太郎文学を規定することになったことを論じた。

第二章「朝顔」——万太郎と耽美派」では、万太郎の処女作「朝顔」とその反響を整理し、明治末の耽美派の特性、万太郎との関係を検討した。作中の朝顔の記述の変化には時間の推移が示されている。それが主人公の過去に寄せる憧憬の念を否定し、ひいては憧憬という行為それ自体の不可能性を主題化していることのうちに、永井荷風「すみだ川」（「新小説」明 42・12）や当時流行した追懐小説との差異を確認した。また同時に、朝顔と主人公とを重ね合わせる表現に、俳人としての過去からの連続性を指摘した。

第三章「連作「お米と十吉」と「暮れがた」——出発期の小説と戯曲」では、自らの小説と戯曲との間の差異にくり返し言及した万太郎のジャンル認識を探るために、出発期の作品に注目した。万太郎の小説と戯曲は相似たものとして従来理解されてきたが、作品を丹念に読み解くならば、たしかに出発期の小説も戯曲もともに、作品に内在的な終わりを形成することのできない困難を抱えていたことが確認される。しかしその理由は質的に異なるもので、とりわけ終わりが形成されない小説の背後には、メタフィクショナルな表現への万太郎の志向が潜んでいたことを明らかにした。このメタフィクショナルな表現への志向は、終章に直接接続する観点の一つである。

ジャンル論を前面に押し出した第三章とは対照的に、第四章「末枯」——万太郎とノスタルジー」では、万太郎の代表作の一つである「末枯」（「新小説」大 6・8）を注釈的に検討することで、ノスタルジーという万太郎文学の基調に迫ることを企図した。「末枯」とモデルとの比較は、人物造型、舞台設定における万太郎の作為を明らかにする。そしてそれは、江戸から続く文化的共同体が姿を消した明治三十年代を描きつつも、明治末から大正期にかけて、その失われた共同性を再興しようとした試みの挫折をも描くための操作であったことが物語内容との繋がりから理解される。その成功のうちに、今まさに失われつつあるものとして、時代を問わず常に背後に意識されるものとしての「江戸」の形象を論じたのが第四章である。

ここまでの四章は万太郎の創作を順に追いかけて、その展開を意味づけるなかで諸ジャンルの関係性に言及したものである。対して続く四章では、ジャンルの問題により強い関心が向けられている。これらはテーマに即して二つで一つの組になっており、この意味で作家万太郎の通時的な検討という色彩は薄らいでいる。

第五章「『道芝』——私小説・心境小説のジャンルの関係①」では、万太郎の第一句集『道芝』（俳書堂、昭2・5）をとりあげ、〈余技〉と彼が称してきた俳句を中心に、万太郎のジャンル認識と創作の営みとを、同時代の文壇情勢をコンテクストとすることで検討した。そこに明らかにされるのは、『道芝』という句集が、私小説・心境小説論争に応じるかたちでのジャンル再編成、ひいては俳句の位置づけの変化に応じた句集であった事実である。そのことを万太郎の俳歴や『道芝』の作られ方の注釈からも確認しつつ、〈余技〉として俳句を提示することで自己の小説・戯曲との差異を際立たせようとした万太郎の戦略を明らかにした。これは第三章での議論を補強する指摘でもある。

第六章「芥川龍之介「蜃気楼」——私小説・心境小説とジャンルの関係②」では、万太郎の諸作からは見えてこない“詩”の意味を問うことを狙いとし、あえて万太郎の作品ではなく、芥川龍之介の小説「蜃気楼」（『婦人公論』昭2・3）を対象にすることで議論を展開した。“詩”という語が私小説・心境小説のモードと直接結びついていた当時において、“小説家小説”としての「蜃気楼」はその読みのモードに寄り添いつつ、それをゆるがすものであったことが、その物語内容と語りとのアンバランスさの考察から明らかにされる。「蜃気楼」における芥川は、“詩”との差異を隠微にアピールすることで小説の固有性を析出し、新たな文学表現の可能性を探究していたと理解すべきなのである。

ここでの「蜃気楼」と『道芝』とはコインの裏表の関係にある。その意味で第六章での議論は第五章の検討を深め、裏打ちするものである。同時に「蜃気楼」に見出される芥川の戦略は戦後の万太郎に通ずるものであり、終章を予示するものでもある。

第五章と第六章では特定の時代におけるジャンルの位置づけを探究したが、第七章と第八章では舞台人としての万太郎にフォーカスしており、そのため対象とする時期は異なるものである。この二章は、その人間関係における親密さ、脚色や演出での実際的な関与は周知のことでありながらも、具体的な像の記述に乏しい舞台人としての万太郎について、明らかにすることを目指したものである。

第七章「『釣堀にて』——万太郎と新劇」では、副題の通り、万太郎と新劇との関係を考察した。小山内薫の急逝、続く築地小劇場の分裂により、昭和初期の新劇界は“前衛派、

と“芸術派”に二分されることになった。ただし“芸術派”については従来あまり顧みられてこなかったものであり、その特徴は漠たる理解の域を未だ越えていない。そこで本章では“芸術派”の代表的存在である築地座と、久保田万太郎との関わりを検討することで、“芸術派”の内実と舞台人としての万太郎の姿を共に浮き彫りにすることを試みた。具体的には第二十七回公演で上演された戯曲「釣堀にて」（「改造」昭 10・1）に着目し、役者や戯曲といった演劇を構成する諸要素の相互的な働きをクローズアップすることで、演劇の新たな可能性を探究した点に“芸術派”の共同性が理解されることを明らかにした。

第八章「泉鏡花「註文帳」と万太郎脚色——万太郎と新派」では、泉鏡花「註文帳」（「新小説」明 34・4）ならびに万太郎による脚色「註文帳」（「心」昭 30・7、8）を通じて、戦後における万太郎と新派との関係を考察した。小説「註文帳」は、剃刀の祟りをめぐる怪異譚とも、主体的な行動としてお若の凶行が位置づけられる物語とも割り切れない小説である。脚色ではそのプロットの円滑化、合理化が目指されたことが、比較を通じて明らかにされる。しかしそうした合理化がかえって物語内容の折合いのつかなさを強調し、謎めいた印象のもとで結末部に〈遊女のまぼろし〉が佇立することになる。そこに戦後の新派が探究していた〈女形でなければならないもの〉の正体の一つが、女形と女優との異質性をバネとする表現であったことを、怪異に対する万太郎の姿勢を踏まえつつ論証し、積極的にその展開に参加した万太郎の姿を確認した。

そして終章「『三の酉』と『流寓抄』——戦後の万太郎の自己表象」では、ここまでの諸章で論じたモチーフのいくつかが合流し、戦後の彼の姿が検討されることになる。戦後の創作の特徴は“自分”を語る小説や戯曲への傾倒として理解できるものである。しかし秘められた本音を語るジャンルとしての俳句という見取図が存在したために、それは従来見落とされてきた。ただし作者自身を思わせる〈ぼく〉を語り手とし、久保田万太郎の名のもとで発表された「三の酉」（「中央公論」昭 31・1）は、こうした理解に異議を唱えている。「三の酉」や戦後の諸作の検討を通じて明らかになるのは、戦後の万太郎が、現在の“自分”からみた過去の“自分”の他者性、他者の眼に映る“自分”と自ら認める“自分”との差異といった自意識をめぐるナイーブなテーマに直面していたこと、そして韻文と散文とを輻輳させるかたちで不連続なものとしての生を、それでいて総体として語る術を確立したことである。同時にそこに句集の位置づけの変容を指摘した。

そして最後に、諸作の検討を通じて開示された多岐にわたる万太郎の魅力的な営みが、彼の死を通じて覆い隠され、現行の万太郎理解が確立することになった事情を解明した。